Midnight Press WEB

No.3 2012 October

http://www.midnightpress.co.jp email: mpweb2012@gmail.com **CONTENTS**

新企画「山羊散歩」その一 「辻征夫の思い出」 ハ木幹夫 井上輝夫小詩集 連載 瀬尾育生 浅野言朗 小林レント 新連載コラム「そよ風」

スニフと 01

元山 舞

と声を張った「それがなんだっていうんだい」傷つきやすい僕は目を丸くして「君はずいぶん可愛らしいね」スニフは言った

悪びれる様子もなく続

け

る

信じてないんだね

よそゆき 良 そ そ 0 れ 11 柔ら きり 草 0) 0 香 か ス 笑顔 ŋ 二 な肌をこすっても が フは 0) するだけ まんま 黙 9 7 しま つ た

きらきら光を反射させて

ラン は スニフと名付けました。 ダ に通じる小さな窓の 片 隅 13 置 か n た小さな葉の つく観 葉 植 物 E



第一回は東京・ 浅草で、 詩 人・ を 辻

「山羊散

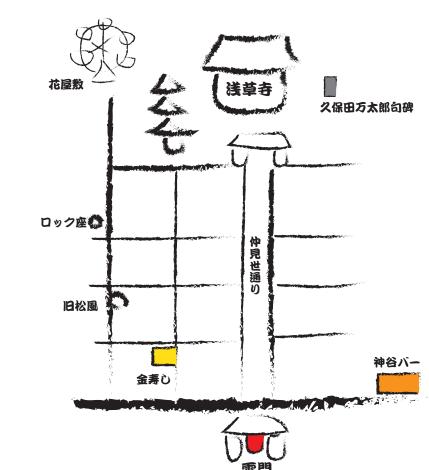
二〇一〇年に名古屋で行った講演録 作品と人柄を深く理解し、そして愛 と書かれています。 に自分の胸の中に反復していた。」 というもの、それを捨てたらば、 点、根本にある憧れだとか、ロマン 征夫という人は、要するに文学の 詩人の闘い」の中で八木さんは、「辻 刊行されました。その第六章「吟遊 さんの思い出』(シマウマ書房)を をもとにした『余白の時間 巡る散歩です。生前の辻さんと深 征夫さん (一九三九一二〇〇〇) 十二年、詩人が愛した浅草を、 人としては駄目だっていうことを常 い交流があった八木さんはこの秋、 現代の吟遊詩人がこの世を去って 辻征夫 原



浅草寺界隈にて

先ず思い出すのは、仲見世通りのいろいろなことを思い出します。ふらと歩いて行った。ここに来るとまずは雷門で待ち合わせてね。ふらまがは雷門で待ち合わせてね。ふら

は常連で、 笑い飛ばしてしまうんです。 入って行ったら、 時は辻さんお酒やめてたんだね。「ぜ の女将さんに「また飲んできたんで 連れてってもらったときには、そこ 厳しい店 身体がふらつくようになっていたん 分かったんだね。 んぜん飲んでないよ」って杖ついて 三本までしか飲めないんだ。辻さん さんと行った。そこは日本酒、 裏あたりにお酒の飲み方のマナーに はどこにあるんだっけ てきてくれた。辻さん、 ょ」って言われたけど、もうその (松風) 亡くなる一年前くらいに 自分の病気のこと、 ジュース一杯もっ 親父さんそれ見て があって、 つなあ。 もうだいぶ あ の店 徳利





雷門

亡くなる半年前の辻征夫さん。

浅草にて

作馬やいろはには(と ちりくに ちりくに

辻さん

0)

旬

がある

写真をクリックすると動画をご覧になれます。久保田万太郎句碑

太郎の 当に精通していて、 ぢりに 辻さんでも知らなかったんだね。 ころにあるんだ」なんて言ってたね。 ていくだけだったね。 だからいつも一緒に歩くときはつ みたりして。だからこのあたりは相 になる小さなお店をちょっと覗い れと浅草の町の雰囲気が好きで、 崖やもう秋 つけてね。辻さん、「へえ、こんなと 太郎の句碑を井川さんが目ざとく見 の境内を歩いていたとき、久保田万 からの詩友の井川博年さんと浅草寺 時代から、 いつだったかな、 辻さんは墨田 、映画をみていたみたいだね。 0) 竹馬やいろはにほへとちり 風の 学校帰りに浅草に寄っ ロディーみたいな「断 たちつてと」 Ш 高校に通 辻さんとは十 僕は方向オンチ って ってい 万 代 そ 7

ジェ ッ 1 コースターが大好 き

番だったらし

61

僕が会っ

ょ

んびりしている印象を受けるんだけ 飛んで渡った。一見ゆるやかな、 らすんだよね。小川も三メー こういうのだめだけどね。辻さんっ ういう乗り物が大好きなんだ。 さんはジェットコースターとか、 吊り橋なんかでも喜んでぶらぶら揺 ていう人は船酔いも全然しないし、 録作ったって。 花 実はすごく敏捷で運動神経がい 屋 高校時代は高跳びで、 来て 思 百メートル走も い出したけ بخ トルも 僕は 高校 辻

でも、

もっと大事

なの

は辻さんの

つも一 腿がすごく太くてね。 Þ ク候補にもなったって話だよ。 Oないね。 は辻さん四十代半ばだったけど太 確か体操で父上がオリンッピッ びっくりした 並じ

た抒情 か、 だけども、 精神力じゃ守れない。辻さんは繊 強靭な精神力。 ィックな人と言うけれど、 人は抒情詩を書く人をロマンテ いわば純粋さというのは、 詩が持つロマンとか憧 それを守る強い意志があ 辻さんが守ろうとし 現代で通 並な 憬 細 と

というタイトルは、辻さんの詩の裏 だ ほ 用 返しで、 61 がする抒 から第二詩集の ないと、 ど強靭な、 俺はもう抒情詩人であるこ 情詩を書こうとすれ 抒情詩は成立し得ない。 知的な構成力を持って 『今は吟遊詩人』 ば、

後 かになってるんだけども、やっぱ背 歌 あ 0) Þ 11 後 いだしたところがある。だからそ つめられたぎりぎりのところから · う 抒 強 けないんじゃないか、という追 吟遊詩人であることをやめなき の作品を読んでいると、 い意志がある。だからこそあ 情 詩

> の思い けど。 ね。 ね。 今は様子が変わっちゃったね。 前も辻さんと歩いたよ。ずいぶん おっと、 昔からあるこのストリップ劇場 半端な精神力じゃ書けな 出もあるよ。教えてあげない 気づいたらロック座 秘密

この黒い板張りの外観は変わってな 前は確か「松風」だね。ここだよ、いたマナーの厳しいお店。お店のタ いだね。今は普通の飲み屋だね。 あ、 あっ 経営者変わっちゃったみた たあった、 さっき話して お店の名

が生まれてきたんだ 伸びや 念だなあ。 いけど、



花屋敷



ロック座の前で



旧 松 風 の 前 で

しに

こは女将さんが握るんだよ。 辻さんともよく来まし 正 太郎、 も通ったという金 珍しいよね。 旦那は た。 さあ入 寿

が

う」って辻さん言うから二人で遅く 酒をグイっていい飲みっぷりでね。 まで飲んだんだけど、その 数人で飲んだあと、「もう一 キーをスト はもう全然ダメ。 すごい飲みっぷりだった。 さんはお酒が強くてね。 内にてビー レートでクイって飲むん を それ 飲 で深夜 、時も日・ 軒 ウ 一時 行こ 一度 イ

言えば うことが困難な時代で、 して書くことで、 一き方 てしまう。 じるんだ。 そんな辻さんの男らしさ(っ 死語かな?) は、 難解 けるということは、 な、 分で覚悟 ソドックスで、 分かるような日 辻さんのように いま抒情詩を書くとい 言葉をひねくりまわ その困難さから逃 がないとできな その抒情詩に どちらかと きちっと 本語で 真っ正 ょ

文学の道を選んだんだ。 弟の憲さんも、 文学の道に行きたかったけど、 だよね。 思うに、 外に出さない豪気さなんだね。 とにかく豪気な人だね。でも決して 尾に行っちゃったみたいなんだ。 ところにいるんだ。 は兄だって言ってた。 て辻さんは実質的には長男だからね か官立大学に行かせたかった。 さんは役人で、 向から対決した。そのとき辻さんは は十八の時に辻さん家出をしてるん んは相当辻さんには厳しかった。 中で学び取ったんだと思う。 れは大変だ、 話があって ている人がいる」 か それはお父さんとの対決の 大学に行く行かないで真っ なんて話になってね (笑)。 奥さんに連絡したほう ね。「なんか今ぼく変 息子は絶対に東大と 父の直撃を受けたの 宅したら ドラム缶に火を でも辻さんは なんてね。 辻さん お父さ 僕が まし お父 か 実 高 5 な に め

て言 ん 自 るくらいでないと、 立 は 書けないんだ。 っているっていう意識を持って ってるけど、一人で野の果てに ある意味で男らし 身の言葉でね、 狼の悲哀」 情 んだ。 詩 なんて

りますけど。 もちろん、ユー なんて言って読み飛ばすことができ 単に平明な、 きちっと読まれるべきだと思うね。 まったく文脈が読み取れないような ょ。 で辻征夫の詩っていうのはもう一回 のがまかり通っている。そんななか 情 い厳しさが辻さんの 7 ところが最近の かも 片っぽでは難解を売りにして、 緒的なものが蔓延しているでし しれない ライトヴァースの名人 モアとウイットも け 抒 بخ 詩にはある。 詩 垂 は、 れ 流 私 L b あ 的

が亡くなったり、はね、あの東日本 ると、 5 くるような声 を じられたんだけ ころがあった。 7 なかで、 を取り上げようと思った最 れるようになっ 明な言葉で語りながら、 いる奥深さが それにこの企画 めた人間の、 あの東日本大震災で多くの 奇妙にね、 辻さんの詩を読 が聞こえるんだ。 ども、 前から辻さん 見えてくるようなと 日で真 辛い時期 辻さんの詩 番 より 底辺 っ先に 要する み返して 心から出 深く感じ 深さを感 が 初 の詩 が持 つづく の理 辻さん 由

て、

写真をクリックすると動画をご覧にな ます。



山羊さんの今日の

だ。 書いたんですね。 ながら自 んは リカ う人は、 ながら」という詩を読もうと思うん 夫さんの紹介でこうした新しい 詩人・作家ですけど、 役に立つこと』を書いたアメリカ ろ』とか、小説 る「レイモンド・カー ルレーヌの余白に』に収められて んでいるのだけど、今日は詩集『ヴェ そんなふうにいま辻さんの詩を読 レイモンド・カーヴァーって レ 0) イモンド 詩 詩集 ゃ 分の青 小説を読 『水と水が出会うとこ 『ささやか 春時代を振り返って 力 ちょっと読 んでいて、 - ヴァ 僕らは中上 ・ヴァー だけ 1 んでみ を読み を n ・アメ

ほ

辻 レイモ ンド・ カー ヴァー を読みながら

レイモンド カー ヴァー を読みながら

ぼくの生 一涯で

ん悲惨だっ 治居酒 たの は e V つだろうと考えた

次は椅子ごとひっくりかえって焼酎の甕に いきなり落ちて い木の椅子からころげ落ちたことを思い 這いあがってまた落ちて 出 した

あたまをぶつけて がらんどうのこころだから鈍く 甕は

ごんと鳴ってすこし揺れたのだ 八月の

午後で西日 のお婆さんは背を向けて居眠りをしていた が射す 知るひとのすべて 居 酒屋に客はぼくひとりで

友人のすべて ぼくが愛した

いくたりかの少女もみなぼくを忘れた(とき) まぶた てのひらから血が流れぼくは で

ひとりで立っていられるだろうか

いて行けるだろうかひとりで

うなだれて

あたまはこんなに痛いのに もしかしたらもうじきぼくは 考えるテー 日はこんなにあついのに ؿٚ かも知れないのに ブルに 血はしたたって溜まり

丸い背中の向こうから お婆さんは目覚め ・びきまできこえはじめた

> だよ。 る辻征夫ってのは、実は最後の詩集 これはおそらく辻さんが高 に辻さんの抒情詩が一貫して凄まじ にまで繋がるんだ。まさにね、いか まみれの批評さ」と書いていること 非常に正確に現実社会を見ている人 帯文に井川博年さんが、「いや彼は 頭をぶつけて、 たのじゃないかな。この焼酎の甕に 分が一番悲惨だった姿を考えて書い ら結婚する前の、 いものかが分かるね けない時代を潜っているときの、 『萌えいづる若葉に対峙して』の ちょうど浅草が出てくるでしょ。 萌えいづる若葉に対峙する血 血みどろになってい 作品がなかなか書 校時代 É



覧になれます。 写真をクリックす ると朗読 の 動画 をご

最後は神谷バーで一 杯

らいに見事に出てる。詩人の感性て だ。浅草を知らない人でも見えてく ことを言うとね、辻さんの詩を読む きましょう。 ついかがわしさがいいんだ。きれ 事にしていたね。特にこの浅草の持 うし、辻さんはそのことをとても大 いうのは案外、空間が作るんだと思 もそれはあるね。あれは羨ましいく 江戸前の部分があるでしょ。小説に ているんだな。だから辻さんの詩は の空間が辻さんの中にぴちっと入っ らく生まれ育った向島や浅草の路地 るような普遍性を持っている。おそ と見えるんだ。 とね、この浅草の路地がはっきり を歩いてみたけれども、 ここも一緒に来たね。 じゃあ、ここでもう一杯やってい のっぺりとした町はだめだね。 抽象的じゃないん 一つ重要な 今日は浅草

(構成·文 /中村剛彦



安曇野小詩集

井上輝夫

さやかに

はじいてゆく 赤松林の太い弦を 三日月は爪のように

中 秋 せせらぎが喝采する さやかに かすかな月明かりの響きに

秋

湖の緑の深みをのぞく 釣り竿を肩にした男が ところでいま、宇宙は何時なの 夜の入り口のほうへ 山麓へ群れとぶカラス まだサフラン色のただよう

金星のまたたき

釣りあげる 紅色の秋 虚室のような心に

三七億年目の秋

狙うのは

予告

ゆっくり 初冬の宇宙に傾いてゆく

冬の林

ことばの外にでた詩 命の合図をきいた 枝から枝へ 終日 ひとり冬ごもり 音符のように…… 枝えだを餌をもとめて 四十雀は群になって飛ぶ 雪 一の日 人は

早春

ふっくら 空の酒瓶から 井月さんが あちらの谷では 山肌に蝶の雪型が浮かんだ、とな乳川の水が嵩をまし かぼそい枝にぽっちりあかい芽 コゲラ? それとも光の粒子? どこかで春を叩く音がする、とな 諧の芽がでた、 とな とな

告げる 流れだすまたたきの光 星 あすの白鳥の訪 一の柄杓 ħ

7

鬼き 無な 里さ 0 村

鬼などはどこにもいやしない 雲のヴェー おも 鳥たちも空の青さに酔 うまし飯 うまし酒 つつましい暮しも豪華 五柳先生 ここにいらっしゃ まだ白い唐松岳は嫁入り 氷とける軒下に ずくの落ちる音 L ろい名前 ルをなびかせてい 0) がした 村に いし で れ る た e V

散 策

ずうみの水は緑

望むものとてなにもなか さかさに映し 渚におちた花の唇を掬った 初春の香りのほかは はてもなく風もなく 白い峰みね さかさに]岸の桜 五、六本、 映し 9 た

とおくでは ゆっくり白鷺があゆむ 耕す老いた農夫のあとを 田 には水をはり 雪型

馬

0)

が あ

5 わ

n

水車をまわす水の音 ŀ ・地ノ営ミハ

> 人生ハ幻化ニ似ル千年ノ痛恨 千年 力 -年ノ夢

盛 夏

かか

死者のなつかしい 月が白く浮かぶ これをさか 時をこえて語りあう 黄泉の夕暮れではない 一番星がともる いまや有明山の 赤 会いたかった」 一福の時 松の林をつら わ な いた声 か な か ĺ 11 な に 7 肩には ぬ か 瞳 な き

0 お わ ŋ

夏

嵐

0)

夜は

明け方 錦秋の静かな山へ なおも遠くの季節へ そろそろ栗も落ちるころ 子を胸に降りてくる ぱらぱら降る松 を抱えて登る 野猿が山寺の 葉 道 13

8

時 間 は 1) つ ŧ 回 帰 し 7 51 る 3

本 0) 血 ア ンド IJ IJ ス ュの ĺ 血 だ ワ イエス 追 しノ 越 し 車

瀬 尾 育 生

とうを

え

ば

彼

は

5

るような気がした。この感じについ家の不思議な技術に引きずり込まれ 館だった。展示されていた作品 たえているように感じられ、この画 リジナル による複 私は二〇〇二年一月に、こう書) () () 年 のまったく新しい感触をた の水彩の画面 0 0) その半数はコロ 九 月 を 伊 は が、二、三点 豆高 じ 8 が、「リアル 原 7 0) 見 グラフ Ι た のオ 美 0) は 数 術 は 父から、 うことを。 えてゆかなけ つ かーー た。 私 だ どの が、 n ほ h

れているように感じられる。これがこの透明な「媒質」が――写し取ら 画家と対象との間の「空気」が―― アリスティック」だろう。 微細だが決定的な違いだ。たとえば、 いうことと「写実的」ということとの、 の絵を見て感じるのは、「リアル」と の絵の中には、対象が、ではなく、 てるべきか迷うが、たぶん ――アンドリュー・ワイエス 」という概念にどういう語 IJ 「リアル」であるというこ アリスティックな だ。その反対語 父の強いエ ディプス 彼の父は 6挿絵画 品である ij だ タを見ている が 独 1 L 最 が絵

ようにするにはどうしたらいい にリアリスティックであることを超 つまりリアルであるためには、 だけを学んでいたような気がする。 するにはどうしたらいいかーー決して父のように描いてはいけな ば ならない か、と 11 ί. か な 11

られた、 られた、画家自身の「解説」である。された一四二点の作品すべてに添え これは、その絵に劣らないくらい えている。たとえば一九八六年作 タログでなにより重要なの で、幸運な偶然で手に入れた。こ タログを、二〇〇一年の 九 スコー 初、 特な「世界」との交信の仕方を トな光景を受け止 絵を書きながら、 い散文だ。これらの散文は、 五 年のワイエス回 はながいことさが 海岸にあ ル」という絵 る自 宅の前でレ がある。 めてゆくとき 眼前のプライ 顧 展展のときのときの 秋に 画 古 画家 ガッ 家は 出 0) 0) _ 書 の伝 0) ベ 美 品 カ 店 カ 九

> 立ち現れてくる。 在」自体が、「リアルなもの」としている」。こうしてなにものかの「不 て、ここにいてその存在感を示して 一姿を消 には る。「ベッ まに が 掛 けら 妻のレインコー か は してしまったが、 れている。 が ツィ 描 風 ガ き 13 自 ツ 加 吹きさらされ 身 えら タも 画家 は、この トと双眼 姿を消 れ 依然とし は述 61 絵 ベ 鏡 7 か 7 だ 0 て

いけ

0) る 0

が「自 意味がある、と信じることができる ると信じている。それ に必要な「すべて」が――告知され 受けて、アメリカの「 ための、不可欠の信憑であると思う。 全体が、あるいは人間が生きること 界を描きながら、そこに「世界」 分のプライベートな、 ペンシルヴァニア州 家になった。 なって多くの栄誉賞 地方的な)画家であった。 だけで描 アンドリュー・ 前 ドと別 記 のカタログを最初に開い 分で感じ、考える」ことには 荘のあるメイン州クッシン き続 だが けたリージョナル ワイ 彼 には生 や名誉博士号を チャッズ・フォ 限定され ・エスは は一人の人間 国民的」な 涯、 彼は 故郷 晚 たと た世 年 0) 自 0) 画 13

> 隅に 引 く まったリスが加わった。古いチャッ ラッシュにこすりつけた。」 を入れて、 る。「私はこの生きものの血 リスの血だ。」――と画家は述べてい のだ。「本当の血が見えるだろうか。い出てきたリスを轢き殺してしまう 走るようになって、ときどき道に迷 ズ・フォードの町にも車がたくさん が、ある日そこに、車に轢 ケ は でいる一 月もか ÍI. を 描 \dot{o} か して死んでいる。 匹 かってこの リスの その のリスであ 道 次では ĺЦ. 家を描 をこのドライブ で なく、 る。その か 画家は 血の中に いてい れて死ん かれてし 右 ij 下

象徴 とを超 定的なは せ、そ 世界へ越境している。 て彼の指 れた、「世 のとき、 める。そのやりとり 待ちうけ、やってくるものを受け な気がする。 る。――ここにはある過 るリスの血を指ですくって筆に含ま たリスを見たとき、 境— かれは追い越し車 する 彼 が 越 れをキャンバスになすりつけ えてリアル 生涯 待ち受けてい にすくい 界」からの告 行 IJ 境行為が含まれているよう アリスティ 為だっ 目の前に起こることを か けて求め続 であ たのだと思う。 取られる。それこ が、 一線で車 路 リスの血 ックであ た彼に与えら ること―― 知 面 剰 向こう側 に流流 のようにし なもの、決 けていた 13 れて るるこ はそ か Ŀ を 0) 11

が、 ス・ホーヴィングによって取 *これ 説は一九七五年以 材され、 訳は鶴岡

的

な写実技法を駆使できるようにな

た海

が描き込ま

れ

け放され

た扉

だからなのだろう。

だがすぐに

眼

0)

で、

絵 何

の中には窓から見える荒 度もスコールがやってき

空がこんなに暗

0) 光

は、こ

n

が

7月光

配置を父から学んで、

で

ち、テクニック

11

・だに

が完成する

かの

あ

名の黒 古い家

家が住んで

で

たのだと言

全

が差している

の姿を描こうとする。

る。それは独立 面の左上には一

戦争前に建てられ 軒の家が描かれてい

た

で、

ウィンフィー

ルドという

き、私の目をひきつけ

た絵の

場合、

画

$\widehat{\mathbf{2}}$

浅 野 朗

も内在している。 通りイエス・キリストの教えである えてみたい。キリスト教とは、文字 キリスト教なるものを少し考 根幹に据えていると思わ 宗教として広範に伝 戦略的なシステムを は、三という構 その仕掛けの素描 る 0) 义

イ エスの生

る。 生涯 あることは広く知られている。 いたエピソードによって彩られてい れており、 エス・キリストが実在した人間で 馬小屋での生誕、やがて信仰を 聖母マリアの処女懐胎から始ま は何よりも『新約聖書』に書か リスト教の信徒ではなくても 野での修行等を経 劇的でありつつも 犯罪人として十字架に 三日 て、 1後の復 寓話め 布 彼の 教活

そこでは、多くの 英 雄 に伝と同 様 彼

> いる。 葉の威力・魔 こでは、彼がその度ごとに発する言 幾多のエピソードを繋いで行く。 スの る様々な物語として、 く流布されており、 ステンド ば西洋の て来た。パオロ・パゾリーニの "奇跡の丘』(一九六四年) は、イ ドの演劇性と連続性を軸に描かれ 生涯を時系列に沿って辿りつつ、 的 劇 グラス、レリーフの 教会に行けば、 なものであるから、 力が印象的に描かれて か 多くの媒体によ 涯として単 各々のエピソ ークーク 絵画や彫刻、 形で広 映画 例 線 そ え エ 的

多くの彫刻に圧倒されるだろう。イ あれば、 造は特徴的である。それは、宗教建 イスラム教と比較しても、例えば三大宗教と言われ スラム を訪ね歩けば明らかである。仏教で 築(あるいは建築と不可分の彫刻) 人に余りに依 入人物 (神仏) による大河的な群像 そこに登場する余りに多く の施設 存したキリスト教 で の中では個性豊かな は、 抽 象的 る仏仏 実在の個 な装 放や 0) 飾 構

> いる。 は認識されても不思議ではない。 とそれに基づく教えであると、まず エス・キリストの特定の個 とそれに基づく図像の キリスト一人にほぼ限定された物語 キリスト教の教会は、イエス・ だから、キリスト教とは、イ を乾 奔流 いる。 人の言 に満ちて 動

ることに結果的に加担した弱い心を その物語は、イエスを十字架に架け でなく弟子からも理解されずに孤立 説き続けることによって、民衆だけ を有した効果とは全く次元の異なっ 世主として待望されつつも、現実性 な利益を民衆にもたらすユダヤの救 う 1 さ 持った弟子たちが、どのように真の していく過程を描いている。そして た〈神の愛〉〈愛の神〉という教えを 涯』においては、イエスが、 (一九七三年) である。『イエスの生 例えば遠藤周作の『イエスの生涯 内 せるに至ったかを描いた『キリス 仰に目覚めてイエスの教えを伝播 面性に焦点を当てて書かれたのが、 一つの物語に受け継がれる。 の誕生』(一九七八年)という、も そういった彼の人間的な実在 現実的

0)

05 『西方の人』

たのか。彼の言動の事実(真実といのようにして広範に伝播するに至っ ぎな いと思われ 特定の るキリスト教 人物を巡る物語 が、 に過 شط

れ 涯』と『キリストの誕生』である。そ うべき ているのが遠藤周作の『イエスの 世紀頃、シナイ半島、 蝋画法によるイエス・キリストのイコン(六 か)を踏まえて丁寧に 聖カタリナ修道院所蔵)

体的に、 版より) (『侏儒の言葉・ が『西方の人』であると言える。具 的正義」の伝播であると考察したの は詩人として捉え、その言葉と「詩 ではなく、 ト の 人』(一九二七年)である。 葉の側面から考察しているのが、 龍之介の『西方の人』『続西方 内面の物語として描かれている。 は、イエス・キリストと弟子たち 一方、特にイエス・キリストの言 生涯を単に実体として捉えるの 芥川 彼をジャーナリスト或い の言葉を拾ってみよう。 西方の人』 キリス 0) 芥

ストになって行った。」(『西方の 13 鋭い舌に富んだ古代のジャアナリ は 初 の弟子たち」) 肼 ま れな 見る見

IJ ス 1 は 彼 0) 詩 0) 中 に ど 0) 位 情

ク

人』「14 聖霊の子供」)

「16 奇蹟」) よりも容易だった。」(『西方の人』 それは彼自身には一つの比喩を作る

「18 クリスト教」)
い詩的宗教である。」(『西方の人』することの出来なかった、逆説の多「クリスト教はクリスト自身も実行

アナリスト」) 作である。」(『西方の人』「19 ジャ息子の帰宅」はこう云う彼の詩の傑息子の帰宅」はこう云う彼の詩の傑は我々自身に近いものだけである。「少なくとも我々に迫って来るもの

(『西方の人』「20 エホバ」)の逆説はそこに源を発している。」義の為に戦いつづけた。あらゆる彼るリストはこの神の為に―詩的正



芥川龍之介

」と書

た芥川

イェルサレム」) (『西方の人』「28「彼は勿論人生よりも天国を重ん

じ

ム至上主義者」) (『続西方の人』「6 ジャアナリズしい彼のジャアナリズムである。」 「クリストの最も愛したのは目ざま

の人』「9 クリストの確信」) う確信のあった為である。」(『続西方すリズムに威力のあったのはこう云いつか大勢の読者の為に持て囃されいつか大勢の読者の為に持て囃されいの大人)

を問 りとも 範に人々の心を動かして行く多少な 使 当てている。ここで芥川 達して行ったイエスの、 その教えを多くの印象的な語句で間的な実在性からやや遠ざけてお 義」と同義と考えてもよいだろう。 あるが、 アナリズム」は、布 アナリスト (ジャアナリズム)」と ーナリスト)としての側面に焦点を 「詩人 (詩的正義)」と二つの語彙を われているとは思われない。「ジャ っているが、大きい違いを持って 芥 わゆる「人生は一行のボオドレ 川 煽動的な印象を与える言葉で 歴史的なその射程の大きさ 考察で ば、この場では は、 イ 教に使われて広 エ スをその 詩人(ジャ は、「ジャ 「詩的正 ŋ 人

> うものである。 せ して、芥川のそれは自らを重ね合わ 生の実体に焦点を当てているのに対 0) 退 行く芸術性のやや技巧的な質をも問 言 察している。それは、詩人としての 藤 づ 葉や比喩の、人生の実体を越えて け つつ「詩人」としての側面 のイエス・キリスト キリスト論は る態度表明の、 な人 生 上 位置づけられる。 延 の考察がその にこれら ()を位 から考 遠

表るためにあるわけではない。時に えるためにあるわけではない。時に 真実を捏造しながら、自律的に広が って伝播して行くシステマティック な性質を持っている。芥川の考察は た側面を捉えている。芥川の考察は た似面を捉えている。それは、イエ たという特定の個人の実体的で具体 かな人生を脚色しながら、より広汎 な教義のシステムへと架橋して行く な教義のシステムへと架橋して行く

06:三位一体

政治的な側面から捉えることも出来国の政治的必然性といった歴史的 部 ある。勿論、それをローマ帝国の内 波 るものでもない。そこには、広範に る 人としての言葉の伝播の軌跡に止ま IJ ハストの 及する別の仕掛けもあったはずで だろうが のユダヤ人の位置付けやローマ帝 キリスト教とは、単にイ 生涯の英雄譚では ここでは、 教義 - エス・ の構 詩 キ

みよう。に内在する拡散性について、考えて

えた、 い物語 うな不可解なものを感じる。 る。けれども、 となるもの。助け主。 の啓示を感じ、 三位を占める位格。人に宿り、 る神、子なるキリスト、聖霊) ると、「キリスト教で三位一体 の要素が提示される。 かりやすいが、〈聖霊〉という三つ目 二つの要素の構図で説明されれば分 子イエス・キリストである、という という神がいて、神が遣わしたの ある」(講談社学術文庫版より)。 この三位の一致したる者(unity)で のおの神であって、そうして神とは あるのではない、父、子、聖霊、 在する、しかし三つの異なった神が 三つのペルソナ (persons) として存 によれば、「それは、神は一つである という教義があり、これは、内村鑑三 いない立場であるものの、三位一体 る。一部の宗派では受け入れられて スの生涯という単線的 書的な意味としては『広辞苑』によ しかし単独(unit)ではない、彼は の『キリスト教問答』(一九〇五 一つ一つの印象的なエピソードを越 母 キリス マリアは処女でありながら 不可解で茫洋としたものがあ 1 に隠された、あるいは 0) に取り憑かれ 精神的活動の鼓吹力 実際の聖書の 組 み立 〈聖霊〉は、辞 慰め主。」とあ てに い込まれるよ で分かりやす た人間 記述を (父な 0) 神意 父 が お

は、 の言 ると、 てき みを スト が 語 が吹 うなも らないような謎めいたものである。 面 ひとり 旬 あ によって身ごもったとさ 集まっていると、 を支配する、 いに響きわたった。 節 る 1葉で語 て、 唐突に人間に踏み込んでその内 らせるままに、いろいろの他 いてきたような音が天から起 の日がきて、 の元に括られて行く。 の不可解な出来事 ったものであることに気付く。 が単純なイエス・ びとりの上にとどまった。 0) が、 一同がすわっていた家 同は聖霊に満たされ、御霊 0) 体説の前まで来ると、 々人間〉 を越えて、 り出した。」。この聖霊と を巡る記 炎のように分れて現れ、 使徒行 分かったような分か 伝 また、 なの したたかな企 媒 述 キリ 介するのが が で 激 る へ 聖 は、 〈父なる 舌のよ スト が一緒 į L いい風 霊 丰 11 五 玉 IJ 0 0 す 0 掛

アンドレイ・ルブリョフによるイコン 至聖三者.

ている や落差 的な構 と現 ていると思わ 分を全て まら は、 神 け 0) 結しているは 〈聖霊〉 倫 だとも がこ うない、 実 イエス・ 丰 理 を、 位的で慈 世 0) IJ 0) という三つめ [´]スト〉 は、 言えるだろう。 界 で、 世 無理 畏怖・脅 0) i V に れる。 交ぜに キリストの教えとして 試 愛に満ちた側 なぜだろう ず 丰 遣 であ であ 矢理説明させる 練との、 IJ わ スト L 愛に満ちた教え しながら補完 威 るに る た 0) 子 にも関 余りの 極 不 か と 0) を用 ? なる 可 面 · う 垂 わ 解 それ 13 図 矛盾 な領 らず、 は 意 イ 仕 は 納 完 掛 L L 直 工

物語〉 その を再 そうである。 ŋ 一ちを変えてしまうような力を持 0) **〜**ジ 丰 . る。 わ 建することだとすれ ヒエラル 両 ij が、〈三台 つつつ ノスト に ヤアナリズム〉 者を架橋 体性と抽 ばノン・スケー 考察をさらに続けて ょ 比 つ 教 位 は、〈実 て 具 キーを守りながら 〈散文〉が厳格なスケー 象性 体 するのが 拡 体 散 連 的 なも され の尺度を絶えず なる宗教 在 で世 ルの であると言え 0) ば、〈詩〉 たの 〈詩〉 個 0) をき 界の 技巧であ 人 であ へを巡 的 行くこ な仕 世 成 で 0 ح か あ ŋ 界 ŋ る

弾

1

藤

に

を

ル

そよ風 #1 出典について

9

F

Þ

す

で

9 0)

たも

よう

他

人

自

覚

小

女的 の諸 お 借 ることに成功した一例 果として、 ストその ったとは言える。 を意識したのかし は引用の定義についての問題を投 ないだろう)、詩人たちに出 ろ 類した注記にはや シンパの若い の的になり ション」の無断引用であ かけた点で、意義のある事件であ 池 主 で (もしその通りであったところで、 なパフォーマンスの中に回 りしました」という伊 張 が 作品に添えられた注 の詩人としての栄誉は 0) あるけ 0) 剽 ものではなく「インスピ 窃を 是非は留保しておくにして うまく彼女自 0) 得てしまう現 行っていたとする片岡 作品から発想 詩 入たちによるこれ たとえば、 しないの Þ 辟 であろう。 易とすると 身 記 か、「声 の詩 パ状を、 全く傷 っても糾 は、テク 藤比呂美 このレベ 出典ある 直 接そ 収 0 伊 を す 巫 結 レ 0

n

げい

ネ そ 中 ヤ 11 のも 宏輔 7 L かしながら、 る詩 ような一 律 しで日 のに対する批評 のように : 儀 に 人の 付 ぬを稼い 抹の さ 場 「引用 合は ħ 伊 た出 寂 藤 別と しさが、一 でいるマジシ 」という行 性 Þ K たとえば 典 表記 L 重 て、 主きを置 13 篇 為 夕 漂 \mathbb{H}

(「インスピ 囲」等) のは K が他 七 意外に大き レ 1 対 の詩 が 年 近く す 残 尚 ショ 人たち して る 直 子 糾 が 11 弾 0 身の もなしにさらけ出 虚さよりも とした作 って 才能 いることは否定できな 消 の限界を、 化 に対するリスペク しきれなかった詩 他者の言葉を自

も自 者の けではあるまい。 を知らない詩の読者が れこれ類推して遊ぶ、 出典を有名作か無名作かを問わずあ われる。 許されていないのかという 出 でうすら寒いものがある。い 日す野 言葉から生まれたものをあたか 分の言葉であるかのように 蛮ささえも、 まさか、 明記されて しているか もう自 それという自 という 増えている 問 亩 や、 いない 品詩に いに 楽しみ 0)

吐

は き

襲

b

0)

ル

か小

ろで、 0) リティに対する謙 は時に、 むしろ、 もあるのだろう。 べしとする、 最初から最 そらく、一度記された言葉の 寄与するのだが しまいうるという「 負うということとイコールではない 自らの言葉に対して最後まで責任を なの 出 典というものへのこだわ では ではなかろう。 葉はどのようにも扱われて 作 :者自· ないだろうか。オリジ 葉の可能性の 後まで作者自身で全う 高潔な理想の 身 けれども、 虚さは決して詩 の手を離れたとこ 現実」— からの安直な逃 (万引き少年) が拡張に 裏返し ---それ それ 管理 ŋ 深く は す ナ は で は お



目 钔 の な い ペ I ジ の た め 2

書物たち 前 半

史で

沌

の 量 駕しつづけている。 現しない。人の全体が綴り テクスト たこの頁 の増大は、一個の生活経 の総体はわたしの み入ることで明 れは超過している。 書」など と黒 つゆく書: 生 細 図 0 位験を凌 一には顕 で覆 部に過 なる。 . 書館 問 61 物 を

故に子弟たち若い者を戒めて兎角に遺伝の抜け切れない先生たちだ。夫の無い時代に育つたのだ。不読書の なら るのを酒を飲んだり女に 記 は Oるのと同様の悪事と心得てる」(「家 色濃く残像する明治の「世の中」(の読書室」 一九四二所収)。江戸 は。「世の中の父兄、彼の生きた時代の書 内 ぬと厳重に叱りつけて、の教課書以外の書物を読 道徳先生、皆多くは 田魯庵 (一八六八— よく立ち回るに 背く悪癖と見られ 知識人を例 父兄、先輩、 「文明」の 外として、読 物 は、文字通 耽つたりす 九二九 0) 読書す た。 んでは の習 位 教 置 L う 育 を

> わせた事 世の中の事は大概間に合ッて行く」とが多い。先書物を読む力があれば、始終それでやッておる、間に合うこ 紛れに、本を読 「しばしば私は ・業するも 0) 読んで、それで間に合質問に答えるに苦し、 ばしばどころでは たちにこう

ち現れる。現象を対処しうる出来事かつ抽象的な人類の「力」として立る」こと。読書はこのとき、実践的おる、その人の言うことを聞いて作 させていったのだむならば、時代は な書物に対 ますけ、 タイト として 大根 馴染み ますけれども、怜悧な人が世の中におる。ちょッと馬鹿じみた人に思い 合、人類の集合的知のこの口の言いよどみでは てること。野菜を肥えさせるために、 彼特 の肥料の法を永い間研 ば、 という言 有 ル 0) に満ちた講 は 経験を用いるのでは 対印された出 ならな ŋ 「葉が明り は \Box 知の鋭 の養 た知を解放する力。 来事に対し、莫大 実 入利と書: 問 演 合 なく書物の 成」であった。 に与えられた · に対 にあって獲 を `\ n 物 究して 9 を 7 充 集 個

> せることが要請された。の痕跡を見出し、「現実」と連関さテクストの中に自らの名、「女性」 (一八九九―一九五一) は として婦人のへた一つ る (「婦人の読書」 一九四 意義であったと思う」。宮本百 をもったのであった。これ 化された歴史と潜在する渾沌の 身の偽りない実状を会得する可 のうちにつながれているか に、自己のくびきを読み取ること。 女 0 読書経験をこのように れば の画期に 明 は、 渾沌の狭 ついまれ 明治初期 がという か す 読 合 的 Ŧ 子な 者 能 緷 歴

かれたものの力を言説の場の末端に見えるが、逆に自己を透明化し、書よって自身の思想を強化するようにメージが浮かび上がる。人は書物に 実状も、立ち向かうべき渾沌も、未まで浸透させる。自らの性差というかれたものの力を言説の場の末端に れ歴 他 て開 現 記 西 ージが浮かび上がる。人は書物、在時を生きる生身の人の不在の を極 史に自己の名を読み取ること。 「者の知のストックで応じること。」述された書物に置き換え、事柄に 欧あるいは自国において、すでに 問 の書 いや渾沌の開く困難の 限 まで強調して読むならば、 0 知 によって予め かうべき渾沌 領 示され あ 域 るい 体

が柄に を、 ح 1 物と人間との干渉が、大正を経由するという不安、自己が透明な死と不在に追いやられるという不安は、ロースの感性を呼び寄せるだろう。 どもを支配したのはかえってあのを直視する運動となる。「やがて私治や実生活のうえで忘却されたもの 可能性 媒体化 まている。これでは、それし非政治的傾向をもっていた、それ们を重んじるという、反政治的ない 化を重んじるという、反政治的ないそれは政治というものを軽蔑して文 は文化主義的な考え方 濁りの部 だ。生活 的・哲学的であった」(「読書 た。あの「教養」という思想 「教養」という思想である。 ることによって変容する。それ 人の生も含めた名状しがたい もちろんこれは行き過 が宿る。 は純粋なものとは 台 分に、 しかし文 権力間 知がその外部 一)。三木はこ んのも 反政治的な ぎたイ 0) 知に 争議 明 0) そして 心は文学 つであっ 部分を な知が、 命を示す に対する メージ な の時 は 政

間 字

0

れた内面性に見い格はむしろ政治を 代を政治 時 的 で懐 代 寒的な時期」 治的外面性 いうような雑 な時期」と述懐する。· 外面性を排斥する「内: に見いだされるべきも や生活の 上 演説から十 出 臭気から 7 で 独 11 な田 省 0

Ŧi.

女学校を

人たち

き自

理

治的個·

<u></u>九

九二十

要請され

その ら 「 一 くま てら らみ ち 路 本 0) る を 0) み 戻 である」(「学生と読 れ 通 0) 九 れるべきだろう。そ戦争前夜の慨嘆は、 れるべきだろう。そして読書に戦争前夜の慨嘆は、彼らにも宛かたが失われている」という宮 合 世 る で る 一界と自己 三八)。 であ わせてみるという気魄 冊 示を指さす ら離れて端的に神 た は、 が知識 の本 る。 め 0) 一分の生活と 読 無言 書を読 生活とを密 0) 0) 近 b そして読 内 書 61 真 あ 了的真理! 是」倉田云 来の ってい 意 る。 政 で 理 義 終に ニー の女性にかが で 示に 0) 究 解 書 気 か 0) ある に百立三 は 0) 書 脱 が チ 分 b 順を な あ

が二庫自十、 た時代の「趣味 静かに落 ○ 静趣か う考えても有難 ヤ映 す て 0 ズ - 銭か三十銭 代であ 由 るア H 1 頃 落 に と してゐる 読 は す し ち キ る。 読 ての 0 ま 田 著 書 騒 イ 走 禿 れ 11 春陽 で自 円 子に 々し 0) は い」(「読 木 読 てゐ るというのは、 本には取 で、 全盛、 \$ 書」一九三 堂文庫 不 飛 分 e V な \$ る いっては 人 勿論、 0) 行 暇が 読み 何 々 な 音 0 自 が 書雑 ず と は 一 時 0 0) 楽 は 改造文 恵まれ たい たぐい、 でも な 11 み 飛 代 を 感」 っ五い 刻 び、 が は لح と b 本 幅 ヂ な L

飾

は

内の

に

9

b

لح

る

後、 子珍宝 林泉に 学 図 ち 文 書館 喪 **丸**中、 富貴 お 一八)と つの け 長 万 利 る 幽の 大 達、 囚 であ す 市 てみ 自 述 7 書 島 陣営、病 こべるに 皆 ら 0) る」(「読書八 0) る 感 書 **青中に在り、即** 風興を綴り「割 テリト と見 病蓐、 くぐり、 至 一って、 羈 旅、 まごう IJ 境」 Ì 楽 僧 院酔大対 を 趣 即妻 物 を

は教

で

文明

面

的

直

関

与

7

11

「目れ

な

あ 目

との

最も大きなカ

テ

b,

11

かに

が

すぎる。

入明も文

化もそれに

のそのの

1

ける差別

治

的であ

いろう

生

を主

とし

7

ŋ

共

0) 犯

ラ

内面

性

0)

0)

する懐

疑の

表明け

力の い。早稲日

世

界に

でも れば、

な

田

書をそれ自

体

の「快楽」「幸

福

に

政 要

賞

賛

する。読書はもは

P

具

体

九三三)と述べる岡

本綺堂も、読

す

れ

ば、

と文化の亀裂、政治及びこの批判は的外れなのの領域を見いだしたもの

と文化の

毛裂、

及び なの

との対立、

おそらくこれ

では 生活 だ。 から

てる。 い た。 内田の る。 底にあ ま り、 の体を中性増 異論 とむり との とな 空虚 0) 実体を事 治 な 的 田 ようなもの 自 和にお 進し刺戟 b 知。識い 家 5 と 0 用 ŋ は だ。 な主 る諸 らの しろ共存 あ 物 物 11 し刺戟する最良のあだろう。しん 人の問題という言葉が表 の「読書を以 着 う政 き 相関 は 61 0 庭 読書行 体の 無力 な臭 ては、この 消 力の 間 柄の背後に隠 0) 関 読 治 での 言行為は力の 大さの一時か 掌に 的立 問題と混 大衆向 とし 係に置 すること を 物 運 べる とし 動 地 動を人に 二)。 書 7 収 げ 場 事 7 第一の て、 つつつ の計しず あ 政 け 0 ま か 争 か ですることに いの文章を先 で、 議 5 ŋ 0 的 治 n ぬ」(前 い、万有 慾と享 浸透 知 る。 検 b 発 脱 L 的 画 を でである。 でいる。 でい。 でいる。 でい。 でい。 でいる。 でい。 でい。 でい。 でい。 でい。 でい。 でい。 でいる。 でいる。 つくらいを家中 装うの めるも 娯 は 杏 楽と 有 そ 服掲 楽 家 を 物 0) 現 テ れ分

進

そ その容れがば n 5 満 が か は 0 載 Ŋ さ たくさん で ま 波 ように れはに 0 上 て 含ま わ 形 13 ルや色 沸 ま 0) る n た波 き上 書 7 多 物 が 13 だそ < 何 が 0) 0) る で ょ 9 ま 0 5 うに だ見 n あ 7 未の だけ いっても 来 来は る。 想 \$ の過 ح

像 内

てる

壊

震を起こして

を企

0)

種 夫

は

年とともに

増すとす

n

遠

0) 荷

堪え

か

史は、したいくらかざ のに変 れかね たなか だけ 視的 であ 帯び ユー るも 書物 の こ る書 うなる 日 凝視するならばその 九二〇)。 外部 ない。 在 イ 事 か 々に る寺 時に たユ から 変える。し 物 1 トピア的 0) という偶像を介 の一文は、 ツ だろう」 クに背 であ メー 一寺に田 で憂鬱 0 ない近代の運動を安らえるも たら自己 であ かも自然 増 推 顕 ートピアとしての 説 ろうか。 して行う ジにお 5 は 懐 現 明 か つろう。 疑的 自 数 しても 世界と自 な人を慰 してくれるだろう。 定 ら、 千ある かしない しきれ 目に く 書 いて な人 者 のような永遠 物崇拝者の 0) そうし 非 しての 毎 0) 考えてみ て拮抗させる。日然を未来の気 が意味に に見える 子楽をニ ない 年 がら 日 籍 め 13 る。 歴 は 間 0) 0) 生史と称う 物 み 寺 7 万 新 将 歴 所 をも せる。 来は ると そ 理 政 孤 史 心 ヒ . ح 現 聞 浸 田 食さ リス 広告 分を 0 わ 学 治 独 寅 13 0 れ سط 幻 な を 0 す 性 を 彦

えうる び 寄 せる る 0

てて、 ある の 立 母、 かを確 出 一つは立原道造の晩 0 かと 自分の存在がいまなぜここにつまり祖母の出生地を探りあ 道造を教えてくれた母 認すること、もう一つはそ 分にとっての「詩」とは いう必然を確 1 ツを長 年の かめること る すのさら 足 旅 べであ 跡

復することなくこの世を去る。昭和崎で喀血し、東京に戻されるが、回寒はしかし残酷であった。立原は長時であった。盛岡への旅を終え、残され地で、「生きられる」と信じたので とも 言 赴 ジに立原道造論を書き綴ってきたこ ミッドナイト・プレスの 準備 言で言えば、詩人は長崎という土いたのかはほぼ了解済みであった。 原道造に関 ができていた。二 二十四歳であった。 なぜ詩人は長崎へ晩 しては そ ホー 年 れ 程な ŋ ム前 年に ~ から事

た。「現実」は は 鏡のごとくすべて反 実」であった。そして「生」 道造という詩人にとって、 詩人は生きようとして死 夢」であ だからこそ戦 ŋ , _ 転してい 生 世

を

通

て、

は

0)

頃

0)

母

は

を家

0)

門

か

5

見

才でも であ る か Oで、 を生み出した天 ような日 あ た か 本近 b 世 代 界

光が欲しい。」(「長 版 原 っと美し 道 崎 b 0 1 が } 欲 -<u>」</u>、角 欲しい Ш

向かいた。直 ほど歩いたた人宅の 熱にうなされながらこの小学校のきた小学校が今もあった。立原は向かいには明治期に長崎で最初に 庭から「ざわめきがきこえてゐる」 ど歩いた細い路地にその一つである眼鏡橋から百 こう記し 接番地をたよりに行 誰も住んでいない空家が の病 倒 れた詩 人 崎の が 運 当時 ってみ 観 メー び 光名 あ あ 1 ま 校 る 高 で ŋ ル 所 n

この本が出たのは昭和十一年。立原を繙いた。俗に「名著」と呼ばれるチに座り、保田與重郎『日本の橋』めた」眼鏡橋まで行ってみた。ベン が詩人として活躍この本が出たのは 暗示するところは、民族の「端」=保田がここで示した「日本の橋」が る。「二・二六事件」がおきたこのが詩人として活躍しだした時期で 詩人が病室から「ぼんやりとなとノートに弱々しく記している。 |終末」であ 美」の)湧き出 界であ から「ぼんやりとなが 入り ずる源泉であ は 民族の ると同じ 向こう 時に古 り、一日 代 側 本

架け」たこの橋もまた「日本の橋」
支那僧如定が支那の石橋の法を以て
が、この書は実に美しいと思う。眼
が、この書は実に美しいと思う。眼 であり」、詩人はその「悲」そが、「神と人との間に架 で あると述べる。名だたる近代詩人た花」として歌い大衆へ伝える存在で Ш あ 「日本の に 美」を湛える名橋 に架けられ 心劇」を の一つ 「た開橋

たのであった。苦労つ横浜に流れ着き小さな と のがの は っほ いう。 市 ど遠くない大浦天主堂界隈 ひとまず眼 で私の祖母は外国人向ける。明治三十八年にこの外 に 民 に出師橋があり、その病院になっていた ~へ向 祖母が生まれた場所 かったのだという。 鏡 :生まれた場所は、今苦労つづきであった 橋 を た。 元終える そこから兵隊 当時 ٤, へ向 国 少女 人居 は さ 目 か

現実の こう側 ばらく思いを巡らした。 あった。しかし、戦争期にこの またそれ 「向こう」 り、 保田 私 が述べた「詩」であるか、 醜さに絶望して死んだ立 は 美 違 側」に何を見ていたか。それ の母を育てた祖母も、 に耐えながら戦後まで生 単 しかったが、「 なる現代の長崎の てみ は し 一原も、 世 0) 並 0 で

には帰らなかった。 ずる姿勢を不思議に思ったが、い「怒り」ではなく「祈り」でもって 天主堂のマリアの首を見た。 なって見え、 も人に頭を下げていた祖母の 人類 次の 袓 最大の罪科に、長崎の 日 母は結局一 は原爆資料館に 納得がゆく思いがした。 度も生まれ ゆ き、 姿がい 人々 私 はこ 浦 重 応 が 0

に保 分から の巡視船が何艘も停泊する長せてから眼下に広がる、海上 なけ 配が 見下ろし し」の「向こう側」に 現実」なの もうゆ その し、これ れ が述、 後宿 出 ば なくなった。そしてあ 凹しながら、到いかない」とい た。「夢は そのさきに べた「詩」 に戻り、 か「夢」な から私はそれ と確認をし 私はこ いう立 帰 ŋ 0) 支 今も 原の を見定 7 かの 度 ~, _ 一保安庁 心 崎 港 風 を 0) 61 る 戦 景 詩 「は 瞬 が は を 前 旬

岡田幸文

ひろがり 谷川俊太郎

ふと風が立つ 私は歩き続ける ものたちのひろがりの中を

すると時が身動きする

時の死がある人の気づかぬひろがりの中にだがすぐ忘れられる

人間の想い及ばぬひろがりに気づいていよう

私に無関心なものたちの間で

生き死ぬことを知ろう

私は歩き続ける。さながら私もものであるかのように

私は見るのをやめる

その時突然私は生き始める

(『62のソネット』から)

詩は、 えるのだろう。 この詩は、叙情詩だろうか。そうで この詩は僕をつかんで放さないのだ。 まっているとは云いがたい。ただ、 度となく読んではいるが、読みが深 来、この詩をコピーしたものを机 という講演をしたときに配られた資 それにしても、いったい、なにを考 はあるまい。「考える詩」だと思う。 いつでも読めるようにしている。何 上に一枚、ベッドの横に一枚置いて、 料のなかでである。そのとき、この この詩を読んだのは、二〇一一年 についての私見 その構築性_ 一月三日、浅野言朗が、「立原道 深く、記憶に留められた。 以 0)

一行一行、一連一連、読んでいこう。

すると時が身動きする私は歩き続ける

ある。 という詩行がくる。この、一見、通 認されている)ということになるの ここでは、「私」(思惟)と「もの」 延長(物体)とを対立させるアレで 体」二元論である。思惟(精神)と は、デカルトの、いわゆる「精神」「 だろうか。続いて、「ふと風が立つ」 は歩き続ける」と記されているから、 (延長) との対比が語られている (確 行を読んで、すぐに思い浮かぶの b な、 のたちのひろがりの中を」。 果たして、その次の行で「私 あやうい一行は、 読む者に 物

さまざまな連想をもたらすが、いまさまざまな連想をもたらすが、にかったり」という言句が含意されていると受け止めておきたい。第四行「すると時が身動きする」は、ヴァレリーの詩句に呼応しているかのようだ。……だが、これで詩を読んだことになるのだろうか。ただ「ものたち」ということばが、ただ「ものたち」ということばが、はまさまざまな連想をもたらすが、いまさまざまな連想をもたらすが、いまさまでは、あのヴァレリーの「風がさまが」ということばが、

時の死がある人の気づかぬひろがりの中にだがすぐ忘れられる

「ひそかな身ぶりも」、「だがすぐ忘れられる」。「人の気づかぬひろがりの中に/時の死がある」。ここでまの中に/時の死がある」。ここでまの中に/時の死がある」ということが)と向かい合う。「ひろかな身ぶりも」、「だがすぐ忘れられる」。「人の気づかぬひろがりの中に」「時の死がある」と。

「もの」(ということば)について考えたいと、かつて長谷川三千子の『日本語の哲学へ』という本を読いだことを思いだした。そのなかに、「この「物」という抽象語は」、「「人間が感知し認識しうる対象のすべて」から、そこに感知し、認識されるすべての具体相を消し去る、というとらえ方で出来上っているのである」、「このような意味のかたちをそる」、「このような意味のかたちをそる」、「このような意味のかたちをそる」、「このような意味のかたちをそる」、「このような意味のかたちをそる」、「このような意味のかたちをそる」、「このような意味のからことば)について

取ろうとしていたのである。 僕はこの第二連に「無」の影を読み述があった(傍点原文)。いかにも、んの不思議もあるまい」という記

私に無関心なものたちの間でていよう

生き死ぬことを知ろう

るそれではなく、第二連に現われた のはなぜだろう。その意志は、 れるのだが、この「転」に惹かれる として、 読む者を驚かせる。ここは、「詩」 意志を表わすことばの繰り返し―は、 こうとする意志のようである。そし し前に向かって積極的にいこうとす て、またしても現われる「ひろがり」。 無」に向かってさらに沈潜してい よう」「知ろう」という、 第三連の「転」— ややあやういようにも思わ - 「気づ 主体 しか (V 0) 7

そして私

はい

つ

その時突然私は生き始める私は見るのをやめるのをわめるがのように

えに、「私は見るのをやめる」。もうと「もの」とは対立していない。ゆき続ける」のだから、ここでは「私」がら私もものであるかのように」「歩がら私もものであるかのように」「歩る」というフレーズが繰り返される。第一連に登場した「私は歩き続け

うような話を聞くと、

ものとしての

「見る」必要がないのだ。「その時突 然私は生き始める」。「やめ」たとき に 「始める」、「始まる」ものがある。 に、「即非の論理」「絶対矛盾的自己 に、「即非の論理」「絶対矛盾的自己 に、「即非の論理」「絶対矛盾のとき ないだろうか。僕は誘われるがまま ないだろうか。僕は誘われるがまま ないだろうか。僕は誘われるが思いのだ。「その時突 中をさまよいはじめる。

は「芝生」という詩である。とつの詩が思い出されてきた。それとうまを繰り返し読むうちに、もうひところで、この「ひろがり」とい

幸せについて語 だから私は人間の形を 私の細胞が記憶して なすべきことはすべて どこかから来て 不意にこの芝生 の上 りさえした いた に立 つ 0) 7 だ (V た

宙で生 素の四元素から構成されていて、そ 90%以上が、水素、酸素、炭素、窒 物質ができたという。人間の身体の らの相互作用で、 力 間」とはなんだろう。宇宙はビッグ づいていよう」と詩人は書くが、「人 れ以外に、地球が誕生する以前に宇 バンで始まったという。 れてきた物質なども含まれるとい という四つの力が生まれて、それ 门間 電磁気力、弱い核力、強い の想 い及ば 隕石として地球に運 次第に最も単純な ぬ ひろがりに そのとき、 核

> 人間、 ろがり」という詩は、まさに「人間 照応していると知るとき、この、「ひ がら私もものであるかのように」と う詩句は、 詩、とりわけ「なすべきことはすべ てくれる。 の想い及ばぬひろがりに気づ」かせ の詩句が、「私は歩き続ける って立ち上がってくる。そして、こ て/私の細胞が記憶していた」とい のについて考えない , 。そのとき、この「芝生」という 宇宙人としての 大きな「ひろがり」をも わけには 人間 というも さな いかな

う らなるものだが、その ある。「日々の断想」は166章か メルの『愛の断想・日々の断想』で いていた。それは、 V ところで、この いうものである。 つからか僕は一冊の岩波文庫を置 詩 ゲオルク・ジン のコピー 冒 頭 の章はこ - の横に、

り、超越的映像である。」
り、超越的映像である。」
「普通の考えでは、こちらに超越的な
世界があって、その何れかに私たち
が属していることになっている。し
でいて、それが抽象され歪曲され
していて、それが抽象され歪曲され
していた、それが抽象されを自然的な

あるような気がする。続けることで、たどりつける場所がという詩を読み続けるだろう。読み僕はこれからもこの「ひろがり」

|★ midnight poetry lounge vol.11 レポー・

アメリカの国民的詩人という印象がある 詳細はそちらをごらんいただきたい。 イト・プレスのHPでアップされてるので、 詩を読むとき、フロストの謎というか闇 大統領の就任式で詩を朗読した詩人など、 ァー賞を四回も受賞した詩人、ケネディ ート・フロストといえば、ピューリッツ midnight poetry lounge vol.11 □ て出かけた。このレポートは、ミッドナ のようにフロストを読むのか楽しみにし のようなものにぶつかる。水島さんがど ができるばかりである。そのいくつか 詩選』などでいくつかの訳詩を読むこと もうとすれば、岩波文庫の『アメリカ名 が、いまフロストの詩を(日本語で)読 フロストの詩を読む」が開かれた。ロ ル会議室で、水島英巳氏を講師に迎えて、 二〇一二年九月一日、池袋・ルノアー バート 0)

前回の岩田英哉氏の「ハート・クレインの詩を読む」から今回の水島英巳氏のたされまできちんと読んだことのないアメリカの詩人を続けて読んできたが、いずれもきちんと「詩を読む」ことの重みを知らされるものであった。midnight poetry らいるものであった。midnight poetry らいるものであった。midnight poetry らされるものであった。



をご覧になれます。写真をクリックすると、当日の様

○最近お酒を飲むとすぐに眠ってしまう。○最近お酒を飲むとすぐに眠ってしまう。にとってはさぞ迷惑だっただろうが仕方にとってはさぞ迷惑だっただろうが仕方がない。詩を書こうとノートを開いたがあるうだが、書くことと書かないこととのようだが、書くことと書かないこととは連続しているとも言える。十九世紀アは連続しているとも言える。十九世紀ア

「何も書いていない黒板を、一種の原初を連続性はどこから来たのだろうか。線上地喩以上のことである。……この黒板にわたしがチョークで線を描く。……この黒板には一種の連続性の要素がある。その点を連続的なものにするのは、黒板のの点を連続的なものにするのは、黒板のの点を連続的なものにするのは、黒板ので点を連続的なものにするのは、黒板ので点を連続的なものにするのは、黒板ので点を連続的なものにするのは、黒板を、一種の原初の点を連続的なものにするのは、黒板を、一種の原初の原神を連続性である。」(『連続性の哲学』 伊藤邦武編訳 岩波文庫)

いる方がいいような気がする。(中村)
れいる。大変魅力的な哲学者である。
今の私には、詩を真っ黒な黒板の上に書く瞬間は多くない。無闇に書きすぎると黒板を傷つけてしまう。しかし最近の民し病は厄介である。書こうと思うと寝にすないか、と言われるが、そうはいかない。今は眠りながら詩の宇宙を泳いですない。今は眠りながら詩の宇宙を泳いでいる方がいいような気がする。(中村)

てみたい。(浅井健二郎訳) ○ベンヤミンのソネット集を読んでいる。 の〔51〕の一、二連を引い難解な詩集であるが、どこか惹かれると

く束縛することか、 なんと容赦なソネット形式は 僕を なんと容赦な重ねてきた嘆きの この韻律たちは

着くのか、 魂は 彼に行き

比喩を語ろう。 僕はひとつの

〈明るくなる〉というのは ここではまルペウスの探索行を ほとんど盲状オルペウスの探索行を ほとんど盲状

冥界の夜明けのこと。

はこんなふうに始まる。コーエンの「ハレルヤ」である。その歌語みながら思い出したのはレナード・

4和音、5和音 と聞いたことがある と聞いたことがある それは一次を称える歌 それはこんな感じさ

短調で下がり、長調で上がる

ツネット〔51〕全行を読み、「ハレルヤ」を聴くとき、ある精神の動きのようなもを聴くとき、ある精神の動きのようなものを感じる。ソネット〔51〕は、「密かが、十分ではなかった」と終わる。「形が、十分ではなかった」と終わる。「形が、十分ではなかった」と終わる。「形が、十分ではなかった」と終わる。「形が、大きにからないと思う。

○今号から新企画二本がスタートする。○今号から新企画二本がスタートする。

ん、ありがとうございました。(岡田) 小詩集を組んだ。巻頭に置く「一篇の詩」 時々組んでいきたい。なお、次号では、 井上さんのヴァレリー論(「コロナ/コ ロニラ」について)の掲載を予定していた なお、創刊号から連載していただいた なお、創刊号から連載していただいた いる」は今回で終わりとします。瀬尾育生さんの いる」は今回で終わりとします。瀬尾でいる。

編集室から —

『流木の人』から三年。詩人の精神が刻印さ川田絢音『ぼうふらに摑まって』2100円〇ミッドナイト・プレスの詩集

れた新詩集



間を独自の感性で捉えた第一詩集。過去と未来とのあいだを夢のように揺れる時柵野初希『夢の揺りかご』 1890円



○ midnight poetry lounge のご案内

midnight poetry lounge vol.12 芹沢俊介「宿 業の思想を超えて――親鸞と吉本隆明」 12月1日午後2時~5時 ルノアール MS&BB池袋西武横店会議室(豊島区南池 袋1-16-20 ぬかりやビル2階 電話 03-5960-0056) 会費=3000円(飲み物代含む) 予約・問合= 070-5579-1564

poetrylounge2010@gmail.com

○詩の図書館 http://www.midnight-poem.com/ 「詩の図書館」をオープンしています。現在、 「詩の図書館」をオープンしています。現在、 の初期詩篇を読むことができますす。

○自費出版のご案内

自費出版のご案内をお送りいたします。たします。どうぞ、お気軽にご相談ください。して、様々な書籍の自費出版をお引き受けいミッドナイト・プレスでは、詩集をはじめと